

研究

独歩と佐伯

——自然と人生——

会 員 山 本 保

自然主義作家岡本田独歩（鉄夫）は、明治四年千葉県に生まれ、

東京専門学校（早稲田大学）を中途して、新聞記者や教師（鶴谷学館）をしていました。明治二十七年、八年の日清戦争には、國民新聞の従軍記者となり、「機密通信」を發表して、文壇に名を知られました。

熱心なクリスチャンで、ヨーロッパの聖書を教養として身につけました。ロマン的要素が短篇を書き、近代日本、短篇小説の祖といわれています。

また、古い道徳から解放を強く叫び、文学史上、ロマンチズムから自然主義文学への橋あらしの役目を果たしました。

明治三十年、独歩は「武蔵野」徳富蘆花の「自然と人生」、島崎藤村の「千曲川」スケツキなどが發表されましたが、ともに自然觀察の文学です。「源叔父」、「欺かざるの記」、「忘れ得ぬ人々」の作品も有名です。

年代順に従って、彼の行動を記述します。

明治二十五年（二十一才）秋から、ワーズワースの詩集、ソルゲネーフの作品を讀みはじめ、思想上の感化を受けました。そして、自然と人生との調和、自然を背景とする人間生活を描くべきと考えるようになり、

明治二十六年（二十三才）九月二十九日、鶴谷学館の

英語、数学の教師として来佐しました。在京中の矢野龍溪先生への推挙によるものでした。

当時、日蕪本線が佐伯を通通していませんので、大阪商船（九州、阪神間）の内海航路定期汽船で訪れました。

同年十一月二日（上）、三日（日）弟收二ととも同勢十人で、桂港（葛港）より船に乗って猿戸浦に上陸し、中越の獵師と狩りをして、辰辰づたいに米水津に降り、浦代峠、木立を經由して徒歩で下宿先に帰って来ました。

——小説「夜狩」参照

同年十一月十八日弟收二を伴い、握り飯四十圓余りを買って、二度目の尺間登山（六〇ハム）を試みています。

十九日早朝、旭の海面より上るを見る。その美水た見ざる所、土の左り。武石氏と三人、此の日彦岳（六三九ハム）にめぐり、一日を山より山の跋涉に暮らした。霞ヶ浦に下りて帰宅す。日記「欺かざるの記」参照

同年十二月二十五日

午前七時すぎ、坂本氏へ現在、坂本 正氏宅への寓居——下宿先——を出立、桂港有る茶店に憩いて、上り汽船を待つ。待つ久しうして船来らず、待たれどおぼれて独り散歩を試む。

妙見の社（坂の浦、妙見神社）に至る。

此社は海に突出せる小丘の上に在りて、樹木茂り、海風梢に鳴り、波濤の響にきこえ、寂寥たる物色。己に吾と弟とを以て之より以前しげしげと米水津に歩しみて道邊せしめたる地なり。

然るに此社の妙見なることを知りたるは此時が初めてなりとす。吾等が徘徊して去る能はず、堂に上

りて或は陸上の戯画をながめ、或は百人一首の中、小野小町、在原業平等数名の肖像に伴う和歌を額にして掲げ左を仰ぎ見、時々夜還り亭、人情入事、天地の事など感想し来りて幽思甚く回深きを嘆えぬ。この古びたる神社、如何に吾が同胞の人々、情の表れを有るべき。汽船来り乗船す。正午と覺し、頃出帆す。

「敷かざるの記」 巻照

冬休みに郷里へ帰省しようとして左時の情景です。一鼓かざるの記」 巻照。

明治二十七年一月、帰省者から、新蘇を巡つて再び佐伯へ。——小説「志村得ぬ人々」 巻照。

同年二月四日

午後、梅牟礼山(三三四)に登る。同行は葉節寺育造、この人は教会主任者なり。藤田、山口政策、長溝、岡崎、武石、尾間以上は鶴谷学校の生徒なり。而して吾等兄弟、兄て九人なりとす。「敷かざるの記」 巻照

同年四月二日

日曜日、教会の人々と共に黒沢(青山)と林十郎処に櫻見物に出行きぬ。此、黒沢の櫻(東光庵)と云ふは、吾が佐伯に来りし時以来已にしばしば耳にする記なりし也。佐伯町を去る三里半の山奥に在り。拜礼(教会の日曜礼拝)終りし後、同行者八人、午前十時半頃出発す。帰定したるは午後七時半なりし。

「敷かざるの記」 巻照

佐伯、蒲江間の道路は、明治二十六年開通しました。往復九時向の散策でした。勿論徒歩で。

同年七月一日(日曜日)

この日午前、坂本(下宿先)を去りて桂港へ渡り、宿へ転す。蒸気開屋なり。——「敷かざるの記」 巻照

山際の坂本家に、弟收ニと下宿して、家族同様の待遇と云うけること九か月。七月一日に葛港の汽船開屋兼旅館藤田(清作)に移転しました。天井の低い二階の六畳の部屋でしたが、水泳のできる海辺近、場所を望んでいました。当時の葛港には民家が三三軒あったばかりでしたが、泳い左り、毎に乗つたりして、七月一日は、楽しく過ごしました。

同年八月一日、彼は滞在十日ばかりで佐伯を去りました。同日、日清戦争が始まり、従軍記者として、戦地朝辭に渡ることになりました。

明治二十八年三月十九日、(三十五才)日清戦争は終戦を迎えました。そして五、六月に亘り、小品「豊後の國佐伯」と國民新聞に發表しました。その一節、

佐伯の春光が城山に來り、夏先が城山に來り、秋又早く城山に來り、冬はうそ寒き風を先が城山の林にきく也。城山寂たる時、佐伯寂たり。城山鳴る時、佐伯鳴る。佐伯は城山のものを水はけなり。城山は遠く佐伯と聞き諸山に比すれば、近く佐伯に接する孤立の小さき山に過ぎず。而も此山よりて此の城市生れ立ちしなり。

明治三十年八月(三十七才)小説「源叔父」と文芸俱樂部に發表しました。

節より一人の年若き教師下り来りて佐伯の子弟に語学と教えること殆んど一年、秋の中頃来りて夏の中頃去りて、夏之初、彼は城下に住むことになりて、

里隔りし徒と呼ぶ港の岸に移りて、ここより枝舎に通いたり。

かくて海辺に止りて居ること一月、一月の間言葉かば寸程の人、讀りしは片手に数手に足らず、その重なる人は宿の主なり。

或夕、雨降り風起ちて磯打つ波音もやゝ高きに、独を舐みて言葉少き教師もさすかに物寂しく、二階なる一室を下りて主人夫婦が足投げ出して涼み居し縁先に来りぬ。夫婦は灯つげんとせせうす暗き中に困扇もて蚊やりつゝ語り。教師は見て珍らしやと坐をゆぶりつ。夕暗の風軽く雨を吹けば、一滴二雨を掛りて三人は心地よげに受けて四方山の話に入りぬ。

明治三十一年四月(二十八才) 小品「忘れ得ぬ人々」を國民の友に發表しました。

同年八月、小説「渡科」を家庭雜誌に發表しました。

住居は東京渋谷でした。

明治三十四年三月(三十一才) 小品「小香」を真藏野に發表しました。番匠川や元越山(五八三米)など自然美に忠実に佐伯での生活を追慕した作品でした。

明治三十七年三月(三十四才) 小説「春の鳥」を女学世界に發表しました。

翌日は城山ですし、下宿していた家の少年に注いでいた愛情が生まれて作品です。

明治四十一年、三十八才の若さで、その短い生涯を閉じました。

独歩は、佐伯の風物をこの上なくいつくしみ、土曜、日曜毎に山野(城山、榊神社、天海山、元越山、金比羅山、浦代峠、鶴見半島、離山、岩倉、木立、米水津村、

青山、番匠川、佐伯湾、葛港、四坪、五所明神社。そのほかには阿蘇山などへ跋涉しました。

その徒脚ぶり、その樞密心には感嘆するばかりです。佐伯滞在十か月の生活が、彼の一生涯を左右したとバツては過言ではありません。それほど、独歩と佐伯は深い関係にあります。

研究

浜後井路の開鑿

―林の水利史をさぐる―

会員 高橋 智

佐伯藩六代城主毛利勝守高陵公は、産業の奨励に關心をもつ藩主として知られているが、浜後井路通水も丁度この藩主の時代のことである。

私達の郷土田中野村は山村の左に平地地帯を占め、当時水田として使われていた。谷川の流れと利用し、溜池を掘りつくりた追田(さこだ)のみで、重要産糧たる米の生産は微々たるものであった。それでこの村の平地に番匠の水を引き入れて米作に用いたなら、波寄、三股津留の二十町歩をこえれば良田が得られて、各地を合せると約四十町歩をこえる良田が得られて、米の増産は飛躍的に増大し、村民はもとより藩として米額を収養となることを着目し、これが工事計画を立てたのは大庄屋河野勘左工門(半五郎)と、豊南高校教諭河野忠雄氏の先祖)であると言われている。

これより年代がわきかかってくるが、五代高久公の時代には小林九左工門によつて小野井路が元禄四年(一六九七)に完工し、宝永九年(一七〇二)には鬼ヶ瀬井路が完工している。その他番匠川流域の土